

寸描 天王寺分館から夕陽丘図書館へ

貴田 春男（元夕陽丘図書館）

館丁（守衛）さんが振り鳴らす開館、閉館の知らせる振鈴の音は、半世紀以上を経た今でも耳朶に新たである。「中之島百年」を繙きながら、戦後間もない頃から中之島 天王寺夕陽丘と共にあった36年間を懐古するとき、ただ感慨無量という他はない。百年の歴史と数々の故事来歴は、本書はあれこれと説き明かしてくれ、時を忘れて往時のそこかしこに引き入れてくれることに感謝したい。

特にこのたびは、天王寺と夕陽丘の両館について何か紹介をということなので、その頃を振り返りながらいくつかの様子を紹介することにしたい。

1 天王寺分館発足の頃

大阪に残された大原社会問題研究所図書館書庫内に設けられていた大阪府立図書館天王寺別館は、1950(昭和25)年4月1日付で大阪府立図書館天王寺分館として設置され、同年8月10日開館。中之島図書館の閲覧係から数名が天王寺分館勤務を命ぜられ、私もその中の一人であった。天王寺分館は木造2階建てで、既に完成し、内部の仕上げが少し残っているだけで、閲覧机や椅子、開架室の設備や目録カード箱の搬入などの仕事が待っていた。

当時の組織は、分館長以下、庶務係、司書係は第1係と第2係、それに閲覧係で構成され、司書第1係は、旧大原社会問題研究所の蔵書整理、第2係は、新刊図書の入入れ整理を担当していた。第1係は戦災を免れた大原時代の書庫内の一室を事務室として整理作業を開始した。焼け残った書庫と新館との間が離れていたため、書庫内での作業が効率的であるという判断からであった。整理は冊数の多い経済学分野からスタートし、現在貴重書とされているデイドロとダランベールの百科全書をはじめマルサス、スミス、カントやルソーなどの名著の初版に出会い、これらを手にしながらかえも言われぬ感激を覚えたものである。

さて、目録はN C R、分類はN D Cの第5版、件名はN S Hを採用。ところが作業開始から数ヶ月ばかり経過した頃、N D Cの第6版が刊行されたため、整理済の図書約3千冊を第5版から第6版に切り換え、8月10日の開館日には、開架室用の図書はすべて新分類により利用者に提供された。

2 レコードコンサートの開催

開館後、図書館業務も順調に進み出した頃、何か新しい利用者サービスをとということが話題になり、レコードコンサートなら開催できるのではということになった。

当時の分館は、大原社会問題研究所の蔵書を母体とした学術図書館という面もあって、開館時間は午前9時から午後5時まで、利用者は20才以上の一般成人（大学生は除く）に限られていた。

したがって、閉館後の時間を活用し、毎月第3金曜日の午後6時から定期的なレコードコンサートを開催することになった。当時はLPレコードが出はじめた頃であったが、価格が高かったため、音楽愛好家にとっては、評判もよく奈良、和歌山などからの来聴者もあった。

解説プログラムはガリ版刷（謄写版）、ポスターは、ポスターカラーによる自作のものを梅田、大月楽器店の店頭に貼ってもらうことを頼んだりした。これもコンサート用の新盤を適宜購入していたことから店主が快く協力してくれたお蔭であった。

一方、演奏用の機器類は、南諭造分館長の計らいで某氏が材料や部品を調達して組み立ててくれたセットであった。現在の多種多様な音響機器に比べると、そのスタイルや性能などは、とても足下にも及ばないが、当時としては素晴らしい音響効果を発揮してくれた。

閉館後、これらの機器類を閲覧室に運び入れてセットし、解説のアナウンスは、曲目ごとに司書が交代で担当した。しかし、夜間開館の実施を契機に多くのファンに惜しまれながら、その幕を閉じることになった。

3 天王寺分館から新館建築までの経緯

夜間開館の開始とともに勤め帰りの利用者が多くなった。主に司法試験や会計士試験などの国家試験を目指す利用者たちで小さな休憩室は、受験勉強の情報交換場所としてとても賑やかであった。やがて中之島から自動車文庫が移転してきて府下一円に対するサービスの拡大を開始する。

しかし、図書館機能の拡大、整備と裏腹に分館は開館後10年程経過した頃から、閲覧室の壁面が剥がれ落ちたり、大原社会問題研究所書庫棟の老朽化による雨漏りが年々ひどくなって

きたので「天王寺分館改築計画委員会」が設置され、5年間活動の後、調査費100万円が計上されたので「大阪府立図書館調査に関する会議」(座長 朝日放送社長飯島幡司氏、調査担当者 京都大学教授小倉親雄氏)が設置され、調査の結果は、1970(昭和45)年11月、「大阪府立図書館基本構想に関する報告書」としてまとめられた。天王寺分館の改築計画を発端に府立図書館全体の将来構想が明らかにされたわけである。

その2年後の1972(昭和47)年1月4日から天王寺分館は館外貸出を停止。2月1日から閲覧停止。その後昭和町にあった桃山学院大学あとの図書館を借用して臨時館を4月1日から開館。それまでの間に開架室の図書と自動車文庫用図書の移転、大原文庫をはじめとする書庫内図書約10万冊を新館完成までの間、住友倉庫へ預け入れる作業を行った。また、桃山学院正門横の空地を借用し、自動車文庫用の車庫を新設し、巡回文庫活動に支障を来たさないように留意した。

4 工事期間中のあれこれ

1972(昭和47)年6月1日、分館の解体工事開始、10月1日、新築工事着工。地下1階(書庫は2層)地上4階(書庫棟は将来2階分増築可能)の建築工事が進むにつれて、当初より懸念していたことが起こった。建物の工事が3階あたりまで達した頃から、図書館西側の民家等にテレビ電波の障害が出始めた。NHKの現場調査を数ヶ所で行って実施してもらったデータをもとに、その対策を検討した結果、影響のある各戸を訪ねながら、共同視聴設備を取り付けさせてもらうことで了解を得た。

又、一方では、地下書庫建設のため必要とされる地下8米の地盤調査は、幸いにも地下鉄谷町線敷設による地盤調査のデータを参考資料として提供してもらえたことは有難いことであった。

しかし、地下工事の掘削作業が始まると、某民家から庭の泉水の水が濁り出したというクレームもあって、府立公衆衛生研究所へその水を持参し、分析、調査を依頼したことなど、工事に関連した数々のできごとは、今でも鮮やかに甦る。

やがて1974(昭和49)年1月31日に工事竣工。続いて館内設備の工事が急ピッチで進められた。特に地下に設置される積層の電動書架をはじめ書架の組み立て工事は、技術者が近くの旅館に泊り込み、その完成を急いだ。

書架工事の完成にともない、中之島図書館から大量の内外特許資料、国立国会図書館関西地区科学技術資料館として寄託されているPB、AD、AECレポートなどの科学技術資料が移

管され、昭和町の臨時館から開架図書と巡回文庫用図書の移転、それに住友倉庫預け分の搬入など順調に進められ、1974(昭和 49)年 4 月 1 日、従来の天王寺分館は、大阪府立夕陽丘図書館として新しい機能を備えた府立 2 館目の独立図書館としてその第一歩を踏み出したのである。